

教材の力



教科書に込めた思い

令和六年度版小学校「国語」

内容解説資料

本資料は、一般社団法人教科書協会が定めた教科書発行者行動規範に則って作成したものです。

光村図書



光村図書

子どもたちの未来のために、光村図書は、教科書の作成にあたって、「環境」「健康」「子どもの特性」に配慮しています。

- ・原料や製法など、環境に配慮した紙を使用しました。
- ・環境と健康にやさしい、エコマーク認定の植物油インキで印刷しました。
- ・児童の負担を軽減するため、堅牢で薄い紙を開発し、使用しています。
- ・カラーユニバーサルデザインに関して、細心の注意を払いました。
- ・児童の学習負担を軽減するように配慮された書体を使用しました。
- ・特別支援教育の視点から、専門家の入念な校閲を受けました。

内容解説資料

発行者 吉田直樹
発行所 光村図書出版株式会社
〒141-8675
東京都品川区上大崎 2-19-9
電話 03-3493-2111 (代表)

光村図書ウェブサイト

光村図書 検索



印刷 協和オフセット印刷株式会社
デザイン キタダデザイン

文章・作品に込めた思い

※学習指導書「筆者・作者の言葉」より一部抜粋。

筆者の言葉



▼一枚の紙に線を描き、蛇腹に折ったことで伸び縮みするようになり、扇型に折ることで円になる。さらにそれがコップから出たり入ったりと動きが生まれ、自分だけの愛らしいおもちゃになる。そんな「一枚の紙が変化していく」という造形の醍醐味を味わってほしい気持ちがあります。
丸林佐和子

▼子どもたちも文様の歴史や、そのいわれを知れば、自分が着ているものに対して愛着が生まれ、大切に扱ってくれるのではないのでしょうか。普段何気なく、単純に「かわいい」「きれい」と思っている文様のなかに、実は面白い意味合いがあることを知っていただければと思っています。
熊谷博人

▼新技術や新素材がミラクルを起こし、問題をすべて解決してくれるなんてことはないのです。日々の着実な積み重ねによってのみ未来を作ることができるのは、宇宙の分野でも同様なのです。
岩谷圭介



▼未だ「人間とは何か？」という問いに対する答えはありません。その答えを見つけるために、世界中で多くの研究者が、様々な分野で研究しています。ただこの問いは、大人になってから見つかるとはならず、小さい頃に誰でも持っている問いなのです。だから小さい頃の疑問に折り合いを付けずに考え続けてください。
石黒 造



説明的な文章教材

1年

新 つぼみ
うみの かくれんぼ
どうぶつ車くらべ
どうぶつの 赤ちゃん

川北 篤

2年

新 たんぼぼの ちえ
新 どうぶつ園のじゅうい
新 紙コップ花火の作り方
新 ロボット

植村利夫
植田美弥
丸林佐和子
佐藤知正

3年

新 「練習」文様
こまを楽しむ
すがたをかえる大豆
ありの行例

熊谷博人
安藤正樹
国分牧衛
大滝哲也

4年

新 「練習」思いやりのデザイン
新 アップとルーズで伝える
新 未来につながる工芸品
新 風船でうちゅうへ

木村博之
中谷日出
大牧圭吾
岩谷圭介

5年

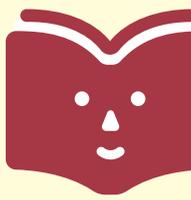
「練習」見立てる
言葉の意味が分かること
固有種が教えてくれること
想像力のスイッチを入れよう

野口 廣
今井むつみ
今泉忠明
下村健一

6年

「練習」笑うから楽しい
時計の時間と心の時間
「鳥獣戯画」を読む
新 考えることとなやむこと
新 考えることを考え続ける
新 考える人の行動が世界を変える
新 人間は他の生物と何が違うのか

中村 真
一川 誠
高畑 勲
鴻上尚史
石黒 浩
中満 泉
福岡伸一





作者の言葉



文学的な文章

▼みきにとって、ナニヌネノンとの出会いは、特別な体験でした。ちょっと、ないしょにしておきたいような、自分の心の中にしまっておきたいような、そんな出会いでした。いつか、誰かに話すときが来るかもしれません。でも、いまはまだ自分だけのひみつです。そんなひみつが、みきを少しだけ成長させるかもしれません。思いがけない出会いや大切な記憶は、人を勇気づけ、前へ進む力となってくれるのです。

(蜂飼 耳)

▼思いこみにとらわれず、日々の生活の中ですてきな発見をしてほしい。三年生の国語の授業で最初に読むことになる物語に、「発見」というテーマを選んだのは、そうした思いがあったからでした。

(如月かずさ)

▼みなさんの周りに、不思議なことはありませんか？

アンテナを高くして周りを見れば、「あれ？」と思うようなことが見つかるかもしれません。そんな謎に気づいたら、「そんなこともあるよね」ではなく、「なぜだろう？」と考えてみてください。そのときに大切なのは、論理的に考えることです。魔法ではなく、論理で謎を解いてください。

(はやみねかおる)

▼くすんだ空を見あげて、その輝きを見つけるには、想像する力が必要です。この「銀色の裏地」には、想像する力を信頼し、想像する喜びを知ってほしいという、わたしの思いを、祈りを込めて書きました。

(石井睦美)



6年

帰り道
あまなし
森 絵都
「資料」イーハトーヴの夢
宮沢賢治
畑山 博
ぼくのブック・ウーマン
ヘザー・ヘンソン作／藤原宏之訳
立松和平
海の命

5年

銀色の裏地
石井睦美
たずねびと
朽木 祥
やなせたかし——アンパンマンの勇氣
梯 久美子
大造じいさんとガン
椋 鳩十

4年

白いぼうし
あまなきみこ
一つの花
今西祐行
ごんぎつね
新美南吉
友情のかべ新聞
はやみねかおる
スワンレイクのほとり
小手鞠のい

3年

春風をたどって
如月かずさ
まいごのかぎ
斉藤 倫
ちいちゃんのかげおくり
あまなきみこ
三年とうげ
李錦玉
モチモチの木
斎藤隆介

2年

ふきのとう
工藤直子
スイミー
レオレオニ作／谷川俊太郎訳
お手紙
アーノルドローベル作／三木卓訳
蜂飼 耳
みきのたからもの
大塚勇三
スーホの白い馬

1年

はなの みち
岡 信子
おおきな かぶ
西郷竹彦
やくそく
小風さち
くじらぐも
中川李枝子
たぬきの 糸車
岸 なみ
ずうっと、ずっと、大すきだよ
ハンス・ウィルヘルム作／久山太市訳

筆者の言葉

▼早朝に見渡した艶やかな風景は、今でも忘れることができません。太陽の斜光が田んぼのあぜ道に輪郭をもたらします。朝焼けを映しこんだ田んぼの水面に牛や農夫の影が揺らめきます。私は、そこに楽園を見たのかもしれない。

(今森光彦)

▼星を見上げるという行為は、私たちが人間らしく生きていくのに欠かしてはならないものだ、私は感じています。上を見上げることで気分が開放されたり、遠くから自分を見つめなおしたり、不思議や好奇心が湧いたり、と、星を見上げることは人の思索や想像力というものに直結し、何よりも、すべての生命にとつての大きなふるさとを見ていることに他ならないからです。だからこそ、「すべての人に星空を」という思いで日々活動しています。

(高橋真理子)



読書教材

1年 おかゆのおなべ

斉藤洋

2年 ミリーのすてきなぼうし

きたむらさとし

3年 鳥になつたきょうりゅうの話

大島英太郎

4年 新 神様の階段

今森光彦



6年

新 星空を届けたい

高橋真理子

5年

新 モモ

ミヒヤエル・エンデ 作 / 大島かおり 訳

「読むこと」の学びに寄せて

教室で物語を読むこと

森 絵都 (作家)

面白い本を読むと、私は今でも「どう思う？」と、誰かの感想を聞きたくくなります。予期せぬ言葉が返ってくると、新鮮な驚きをおぼえるのと同時に、自分の中に新しい窓が一つ開けた思いがします。無限の多様性に恵まれた教室という場で、教科書にある物語をめぐって、無数の窓が子どもたちの視界を広げてくれることを願ってやみません。

書き手として伝えたいのは、読み方の正解はない、ということ。作者の意図を正しく汲もうと努めてくれる読者もいますが、私としてはむしろ意図を超えてほしいのです。小さな個人が生んだ何かを超える自由で広々とした地平を旅してほしい。大切なのは、「作者が何を書きたかったか」ではなく、「読者の一人一人がそれをどう読んだか」だと思います。

今、求められる読む力

三浦登志一 (山形大学)

個人が日常的に情報を受け取り、自らの思いや考えを自由に発信することのできる社会が到来しています。そのような社会に求められるのは、情報を正確に読み取る力です。誤った理解に基づいて自分の思いを発信したり、バイアスのある情報を拡散したりすることは、社会を望ましくない方向に向かわせることにつながります。国語科教育を通して、自分が得た情報を鵜呑みにせず、表現されている内容が正しいのかどうか、書き表し方にはどのような意図があるのかを判断できる資質・能力を身につけていく必要があります。小学校の段階から、言葉を大切に、自分が受け取る言葉、発する言葉の先にある多様な他者を尊重することを意識して、読みの学習を積み重ねることが大切だと考えています。



挿絵に込めた思い

物語文において、文章がピッチャーだとしたら、挿絵はキャッチャーです。時に文章に書かれていることを忠実に絵に表して文章を支え、時に文章に書かれていないこと以上の情報を持ち、文章のよさをより引き出します。

挿絵は、物語の雰囲気を作り出します。登場人物のイメージを作り出します。児童の確かで豊かな読みを生み出す大切な役割を担っています。だからこそ、光村図書の教科書では常に挿絵を見つめ直し、こだわりをもって掲載しています。

茅野政徳（山梨大学）

本物の絵で物語を想像してほしい

あべ弘士（絵本作家）

みなさん、「キツネの顔」を思い浮かべてみましょう。鼻先がとがっていて、きりつとした顔ですね。でも、若いキツネは、顔が少し丸みをおび、かわいらしく見えます。それが成長する

にしたがって、大人の顔になっていきます。そして、けんかのときや、おこったとき以外は、いつも優しい穏やかな表情をしています。

私が「ごんぎつね」でいちばん大事

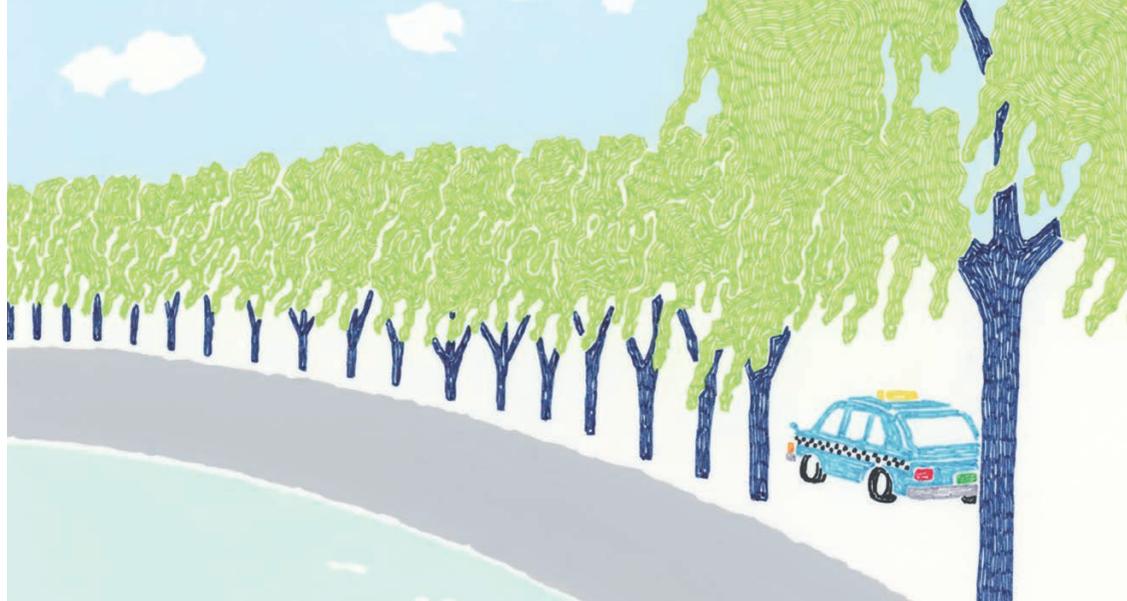
にしたのは、「ごん」そのものです。「ごん」とは何か、が物語の想像に大きく関わります。だから、最初の絵は、「ごん」だけを描きました。「ごん」の優しい内面や、いたずら好きであどけなさの残る性格を、動物として、本物の絵で伝えたいと思って。

彼岸花にもこだわりました。私が住んでいる北海道には咲いていないので、初めて見たときのことを今でも印象深く覚えています。花びらの形、強烈な赤。畔一面に咲いていて、圧巻でした。その中にいる「ごん」の様子、ぜひ思い浮かべてほしいと思います。

最後の場面は、構図にこだわりました。「兵十」の顔は描かないようにしつつ、「兵十」の視点から見た「ごん」に目が向きやすいアングルにしました。

教科書の挿絵は、子どもたちが頭の中で想像するときに、形や事実で助けるのだと思います。だからこそ、嘘っぽい絵は子どもたちに失礼です。でも、博物画のようにだと硬すぎます。その微妙な境目を絵に描くのが楽しいんです。それが文章と合わさって、作品として完成し、子どもたちが「わっ」と思ってくれることを期待しています。





「白いぼうし」は思い出の色

柿崎サラ（イラストレーター）

ぼんやりしていて不確かだけど、ところどころ鮮明な思い出たち。

そんな「思い出」のような色合いがこの物語に合うのではないかと思い、淡いピンクや水色の中に、はっきりした赤や紺色を入れて表現しました。

これからこの教科書で「白いぼうし」と出会う子どもたちは、どのような記憶を物語と結びつけるのでしょうか。

大人になって再会したときに、挿絵のことも少しだけ思い出していただけたら嬉しいですね。

「白いぼうし」の挿絵をご依頼いただいたとき、小学校に通っていた頃のことを思い出しました。授業で音読するときの緊張感や、宿題で母に読み聞かせたときの照れくさい気持ち、そして、次の日その教科書を家に忘れたまま登校したときの絶望感。タイトルを聞いただけでも、とても懐かしい気持ちになりました。私のように、「白いぼうし」を読むと、子どもの頃の記憶が蘇るという方は少なくないと思います。

「やまなし」の青

黒井 健（絵本画家）

いかにも遠くからというように、その波の音がひびいてくるだけです。――

これらの情景描写から、私が表現すべきものは物語の舞台として水面に映る明かりと川底に届く光の輪でした。それと重要なのは水の中であることで、水中を感じる用紙を探し、水面や川底、遠くの水の中といくつもの青を探します。言っておきますがこれは苦労談ではありません。こうした童話への作画から絵の奥深さを学び、表現の幅を広げていく私の楽しみなのです。賢治童話への挿絵はいつもワクワクします。

賢治童話については、「猫の事務所」「水仙月の四日」など幾度か挿絵を試みてきて、その度に彼の記述する独特な情景描写の巧みさに感嘆していました。そしてその童話と共にいられるような絵はどんなものかと苦慮してきました。「やまなし」についてもやはり同様でした。

――波から来る光のあみが、底の白い岩の上で、美しくゆらゆららびたり縮んだりしました。――

――その冷たい水の底まで、ラムネのびんの月光がいっぱいにすき通り、天井では、波が青白い火を燃やしたり消したりしているよう。辺りはしんとして、ただ、

